

[学術論文]

名古屋市の施設に見られる案内の  
多言語表示の実態と問題点

——名古屋城、熱田神宮、金山総合駅の調査から——

The Current State and Problems Concerning Multilingual Signs  
at Nagoya Castle, Atsuta Shrine, and Kanayama Station

成田 徹男・文 秀秀・尹 惠珍・森 未紗姫

NARITA, Tetuo · BUN, Syuusyuu (Wen Xiuxiu) ·

YUN, Hetin (Yoon Hyejin) · MORI, Misaki

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 29

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 29号

2018年1月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JANUARY 2018

[学術論文]

## 名古屋市の施設に見られる案内の

### 多言語表示の実態と問題点

——名古屋城、熱田神宮、金山総合駅の調査から——

#### The Current State and Problems Concerning Multilingual Signs at Nagoya Castle, Atsuta Shrine, and Kanayama Station

成田 徹男・文 秀秀・尹 惠珍・森 未紗姫  
NARITA, Tetuo・BUN, Syuusyu (Wen Xiuxiu)・  
YUN, Hetin (Yoon Hyejin)・MORI, Misaki<sup>1</sup>

0.	はじめに	成田
1.	2015年度の実地調査の概要	文
2.	調査結果の報告	
2.	1. 個人報告抜粋1(文秀秀)	文
2.	2. 個人報告抜粋2(尹惠珍)	尹
2.	3. 個人報告抜粋3(森未紗姫)	森
3.	多言語案内表示の問題点	
3.	1. 語用論的観点から	文
3.	2. 表記論の観点から	成田
4.	おわりに 名古屋の今後の案内表示	成田

**要旨** 人間文化研究所の2015年度共同研究のひとつである「名古屋の観光の潜在的な能力と活性化についての研究」のサブプロジェクト「案内表示の多言語化の実態と問題点についての研究」として、名古屋市の観光施設や駅の案内表示について、多言語化がどのようにすすめられているか実態を調査し、どのような問題点があるかを検討した。つづく2016年度共同研究のひとつである「名古屋の観光と文化発信に関する研究」のサブプロジェクト「多言語案内表示のあり方についての研究」として、前年度調査結果をふまえ、問題点を分析、整理し、今後の課題と改善策について提言をこころみた。

名古屋市の観光施設や駅の案内表示は、多言語化が進んでおり、さまざまな工夫もこらされているが、関与する、あるいは管理する団体のちがいや、同じ管轄でも長年にわたる作業の積み重ねで、不統一が目立つようになっている。リニア開通を機に、名古屋駅の案内表示

<sup>1</sup> 成田：本研究科教授、文、尹：同研究科前期課程修了・後期課程中退、森：人文社会学部2015年度卒業。なお、ローマ字表記については、訓令式で長音は母音字を重ねて示している。また、名前は名字を先にして名字の後にカンマを記してある。

は一新される予定であるが、自治体が主導的に調整すべきである。そして、そこで策定された方法・手段・デザインを市内のさまざまな施設に短期間で普及させるべきである。また、特に展示説明の多言語化では、スマホのソフト利用をどんどんすすめるべきである。

キーワード：多言語表示、観光、名古屋、語用論、表記論、ローマ字

## 0. はじめに (担当：成田)

赤瀬 (2015) は、名古屋駅について、1937年につくられた、2階にホームを置き1階に東西を貫くコンコースをもうけた構造については高い評価をしながらも、名古屋駅コンコースの案内表示に対しては、非常に厳しい評価をしている。柱などの内装の表示に邪魔されて、全体の構造が見通しにくく、過剰な案内表示がかえって旅客を混乱させる、とし、新幹線南口前の情景について「サインを見上げると旅行者に不可欠な地下鉄、近鉄、名鉄への乗り換え情報が示されていない。なんと『名古屋マリオットアソシアホテル』と『ジェイアール名古屋タカシマヤ』の方向指示情報があった。」と述べている<sup>2</sup>。

リニア新幹線の、名古屋までの開通に合わせて、名古屋駅の総合的な整備がなされる予定であるが、それによって上記のような状況が改善されるかどうか。それを考えるために、乗り換え総合駅として、金山駅の案内表示を確認しておくことは、重要であると思われる。名古屋駅周辺の整備、特に駅西地区の整備については、別所・林 (2017) を参照されたい<sup>3</sup>。

本稿は、「多言語表示」という観点から、金山総合駅と、名古屋市の観光施設、歴史的な重要施設として代表的な、名古屋城と熱田神宮の案内表示を対象にしておこなった共同研究の2015年の調査結果の概要を述べ、その問題点の分析について説明し、そこから今後の課題と改善策についての提言をおこなうものである。

人間文化研究所の2015年度共同研究プロジェクトとして「名古屋の観光の潜在的能力と活性化についての研究」(研究代表者：吉田一彦)がおこなわれた。そのサブプロジェクトとしておこなわれたのが、「案内表示の多言語化の実態と問題点についての研究」(研究代表者：成田徹男)である。研究協力者として、文秀秀(人間文化研究科博士後期課程)、尹惠珍(人間文化研究科博士後期課程)、森末紗姫(人文社会学部国際文化学科4年生)が参加した。文秀秀の研究は、2015年度学術研究遂行協力制度(課題名：語用論的観点による中国人話者のための言語表示についての研究)による研究でもある。文秀秀は、中国語母語話者、尹惠珍は韓国語母語話者であり、それぞれの母語の観点からの分析もおこなった。森末紗姫は、多言語表示をテーマにして、2015年度卒業論文「名古屋市の観光地における多言語表示一言語が担う観光活性化と多文化共生」を執筆した。このサブプロジェクトによる調査結果も卒業論文に生かされている。この調査研究は、

<sup>2</sup> 赤瀬 (2015) p.196

<sup>3</sup> 別所良美【べっしょ・よしみ】・林浩一郎【はやし・こういちろう】(2017)『シンポジウム『現代の家守』と持続可能な都市と地域社会を考える』報告書』名古屋市立大学人文社会学部/大学院人間文化研究科

名古屋市の観光施設や駅の案内表示について、多言語化がどのようにすすめられているか実態を調査し、どのような問題点があるかを語用論的観点や言語景観論の視点から検討するのが目的であった。具体的な調査対象施設として、名古屋城、熱田神宮、金山総合駅を選んだ。

つづく 2016 年度共同研究のひとつである「名古屋の観光と文化発信に関する研究」(研究代表者：吉田一彦)のサブプロジェクトとしておこなったのが「多言語案内表示のあり方についての研究」(研究代表者：成田徹男)である。上記の、2015 年度の調査結果をふまえ、成田と、研究協力者である文秀秀(人間文化研究科博士後期課程)とで問題点を分析、整理し、今後の課題と改善策について提言をこころみた。文秀秀の語用論的観点からの研究は、2016 年度学術研究遂行協力制度(課題名：語用論的観点による多言語案内表示についての研究)によるものである。

## 1. 2015 年度の実地調査の概要 (担当：文)

名古屋城は、名古屋の代表的観光施設であり、天守閣は歴史的な文化遺産でありながら戦後再建された近代的な建物でもある。戦時中に空襲で焼失した本丸御殿を木造で復元する作業が現在おこなわれており、部分的にはすでに公開されている。熱田神宮は、観光地としては地味であるが、歴史的に古い施設の代表である。金山総合駅は、名古屋圏では名古屋駅に次いで乗降客の多い、JR、私鉄の名古屋鉄道(以下「名鉄」と呼ぶ)、名古屋市営地下鉄の、相互の乗り換え駅である。今後、リニア開通へ向けて名古屋駅を中心にした言語表示をどうするかという大きな課題を考える上で、有益な手がかりを与えてくれる可能性が高いと考えた。

2015 年 9 月 5 日土曜の午前に熱田神宮、同日午後名古屋城の調査をおこなった。熱田神宮へは、手分けして異なる最寄り駅から入ることにした。名古屋市営地下鉄名城線「神宮西」駅から西門へ、同「伝馬町」駅から南門へ、名鉄「神宮前」駅から東門へと、それぞれ向かうことにした。名古屋城へもふたつの別々の交通手段を利用した。名古屋駅から名古屋市営バスの観光循環バス「メーグル」で名古屋城正門(西側、天守閣近く)へ、名古屋市営地下鉄名城線「市役所」駅から東入口へ、という方法である。

2015 年 10 月 3 日土曜日、金山総合駅を調査した。JR、名鉄、名古屋市営地下鉄の、それぞれのホームから改札口までの調査をするため、手分けして3つの異なる交通機関で金山駅へ向かい、改札口を出る前にホームの状況を確認することにした。その後コンコースで落ち合い、コンコースや駅周辺について調査した。

調査前に、調査について確認したのは以下の諸点である。

### (1) 調査についての確認事項

- ・基本的に観光施設や交通機関を対象とし、飲食店など商業施設部分は対象としない
- ・言語表示を対象とし、特に日本語以外の表示を見落とさないようにする
- ・ピクトサイン／ピクトグラムにも留意する

- ・表示の場所を確認して、写真をとる
- ・各自で整理した写真のデータを全員で共有する
- ・案内などの表示全体の形態や様式を確認する
- ・表示に使用されている言語に注意を払う
- ・推測される表示目的を考えておく
- ・対象として想定されている人物像を考えておく

観察に当たって、その施設を（はじめて）おとずれた人の目で見えるようにこころがけたつもりである。また、表示自体が存在する意味、つまりそこに表示を設置する側が、そこに表示が必要だと考えた理由を推測し、利用者に必要なあるいは便利な表示が適切になされているのか、を絶えず意識するようにつとめたつもりである。さらに、文秀秀と尹惠珍は、中国語や韓国語の母語話者として、中国語や韓国語の表示に問題はないか、という点にも留意した。

## 2. 調査結果の報告

### 2.1. 個人報告抜粋1（文秀秀）（担当：文）

#### 【熱田神宮】

〔調査日：9月5日〕〔研究調査担当範囲：地下鉄伝馬町駅から南門（正門）経由～本殿〕

名古屋市営地下鉄「伝馬町」駅の1番出口から地上に上がると、すぐに熱田神宮方向の道案内の矢印がみえて、とても分かりやすかった。矢印の元には、日本語の漢字表記「熱田神宮」と英語アルファベット表記「ATSUTA SHRINE」があった。2言語表記である。

南門の玄関付近に境内図があり、本宮、神楽殿、授与所などの日本語の表記の下に、アルファベットがあった。英語表記だと思ってよく見たら、「HONGU、KAGURADEN、JUYOSHO」など日本語のローマ字表記であった。境内図の右下に禁煙、飲食禁止、ペット禁止のピクトサインがあった。鳥居をくぐり、境内の案内看板を見てみると、日本語の漢字と平仮名しかなかった。「南神池」等神聖なる場所の説明や売店の営業時間の知らせなども同じく日本語表示しかなかった。しかし、売店のメニューには一部英語の表記があった。他に目立った多言語の案内表示は、本殿の横にある「こころの小経」の入り口にあった。「ご参拝に際しての注意事項」の部分は日本語、英語、中国語繁体字、韓国語の4言語表記であった（2.2の【図8】を参照されたい）。全体的な印象としては、多言語表示が少なかった。

#### 【名古屋城】

〔調査日：9月5日〕〔研究調査担当範囲：地下鉄市役所駅から東門経由～本丸御殿～大天守閣〕

地下鉄市役所駅の7番出口から地上に上がると、「文化のみち」という看板が見える。名古屋城周辺の地図、名古屋城の紹介、文化のみちエリア内の歴史的建築物の紹介が載せてあった。しかし、日本語のみの表記なので、日本語のできない外国人観光客はその看板を頼りに名古屋城までたどり着くことは難しいと思う。

本丸御殿の玄関付近の「下駄箱」、「頭上注意」、「足元注意」、「ご観覧時のお願い」等の案内や注意は日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、中国語繁体字の順番で表記されていた（【図1】）。殿内の「名古屋城本丸御殿とは」、「本丸御殿の復元手法」、「本丸御殿復元の資料」「本丸御殿の公開予定」等の説明も日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、中国語繁体字の5言語で表記されていた（次ページ【図2】）。再建のおかげだと思うが、多言語の表記は全体的に統一性がある。

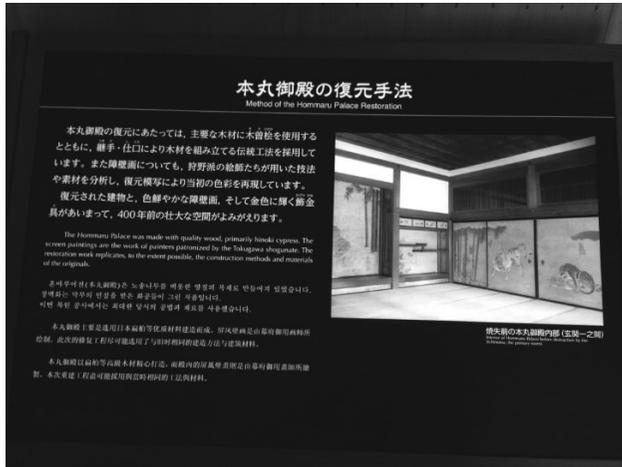
大天守閣のほうは、案内図はほとんど日本語と英語の2言語表記であった。ほかに、「天守閣内にはトイレはありません」の注意は日本語のみであった（【図3】）。壁に貼ってあった「天守閣内への飲食物の持込はご遠慮ください」の注意は日本語、英語と韓国語の3言語表記であった。「両替は売店でお願いします」、「禁煙、飲食禁止、ペット禁止」の注意は日本語、英語、韓国語と中国語簡体字の4言語表記であった。設置時期による表示の不統一だと思われる。

【図1 下駄箱】



【図3 天守閣内に～】





【図2 本丸御殿の復元手法】

【金山総合駅】

〔調査日：10月3日〕〔研究調査担当範囲：地下鉄金山駅（名城線・名港線をふくむ）〕

名古屋市営地下鉄名城線に乗り、金山駅を降りると、まず目に入ったのは乗り換えの案内表示看板と出口案内表示看板であった。乗り換えの案内表示看板は、ホームに何箇所か設置されており、どれもわかりやすく矢印で方向を指していた。名古屋市営地下鉄名港線への乗り換え案内看板は日本語と英語の2言語が表記されており、JRと名鉄線への乗り換え案内看板は日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、ポルトガル語の順番で表記されていた。出口案内看板には改札口、出口、出口付近の主な地名の日本語と英語の2言語表記があったが、エレベーター、エスカレーター、トイレ、切符売り場、コインロッカー等の表記は日本語のみであった。ピクトサインがあったので、日本語が分からない人でも意味を読み取ることができるかもしれないが、一つの看板に2言語の表記と日本語のみの表記が混ざっているのには、違和感を抱かざるをえない。

コンコースは主に切符売り場を調査した。切符売り場の案内看板は日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、ポルトガル語の5言語で表記されていた。しかし、自動発券機の機械自体は日本語でしか操作できなかった。その機械の横に日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、ポルトガル語の5言語の操作案内を記した紙が貼ってあった。駅員さんに確認したところ、数年前に貼ったものだと分かった。外国人観光客は、その紙に記載されている内容と自動発券機の日本語を見合わせながら切符を自力で買うことができるであろう。ほかにも同じような状況が見えた。乗り越し精算機の案内看板も同じく日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、ポルトガル語で表記されていたが、精算機の機械自体は日本語と英語でしか操作できなかった。機械がまだ需要に追いついていないと考えられる。また、自動発券機の付近にあるコインロッカーは日本語、英語、韓国語、中国語簡体字の4言語で操作できるものだった。需要に合わせて設置されたと考えてもいいであろう。

トイレの付近に貼ってあった「長時間のご利用はご遠慮願います。他のお客様もご利用になります」という注意、エスカレーターの付近に貼ってあった「エスカレーターご利用時のマナー・注意事項」、構内に貼ってあった「ビラ配り、勧誘等は一切禁止されております」等の注意はどれ

も日本語のみであった。おそらく駅員は外国人向けに言う必要がないと考えたのであろう。

全体から見ると、名古屋市営地下鉄金山駅は、英語表示はかなり徹底している。しかし、①機械が需要に追いつかない、②設置時期による表示の不統一、この二つの問題点が目立つ。

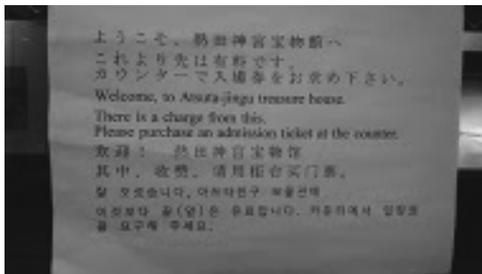
#### 【中国語表示について】

熱田神宮には、中国語だけでなく、そもそも日本語以外の表示が少なかった。名古屋城は、特に本丸御殿を中心に、中国語の表示がかなり多かった。金山駅では、要所要所に中国語をふくむ多言語表示があつて、利便性は高かった。

中国の観光施設で、「出口」表示のところに、ひらがなで「でぐち」と書いてあるものを見かけたことがある。機械的に英語や日本語の多言語表示をしてあつたので、「出口」の日本語表示としてひらがなの「でぐち」を採用したものらしい。中国語の漢字表記でも「出口」なので、日本語表示も「出口」では意味がないと思ったのかもしれない。このように、日中で漢字表記と意味が共通している場合には、蛇足になってしまう場合もある。また、漢字・漢字語形の共通性と差異性について、検討がなされないままに、実際の中国語漢字表記がなされている可能性が高い。中国語でも簡体字と繁体字とが違う場合、あるいは語形自体が異なる場合、日本語の略体字と簡体字がまったく違う場合、それぞれに応じた表示が工夫されることが望ましい。

熱田神宮宝物館に入ったところに、貼り紙で、有料であることが、日、英、中国語（簡体字）、ハングルで示されていた（【図4】）。さらに、別途中国語の貼り紙があつた（【図5】）。外国人客に対応しきれていないようすがうかがえる。

【図4 宝物館の貼り紙】



【図5 宝物館の中国語貼り紙】



## 2.2. 個人報告抜粋2（尹惠珍）（担当：尹、熱田神宮と名古屋城）

### 【熱田神宮】

[調査日：9月5日] [研究調査担当範囲：地下鉄神宮西駅から西門經由～本殿]

名古屋市営地下鉄「神宮西」駅で降りるとホームに多言語表示があつた（次ページ【図6】）。改札口を出てすぐのところ、熱田神宮の場所と周辺案内図があつたが、一部、英語が併記されているだけであつた。地下鉄の2番出口を出てすぐ左側に案内表示が見えるが、「車のおはらい」の文字が大きく、熱田神宮の表記はなくて、「ご参拝は西門へ 300m先」と下に小さく表記されて

いる。2番出口の右側に神宮西駅周辺の案内図があったが、「熱田神宮」自体の表示はない。

西門の手前に「車ばらい入口」の表示があった。お祓いを受ける車に乗って入る場所なのであるが、表示は日本語のみなので、熱田神宮の入り口と間違われるのではないかと（【図7】）。やがて見えてきた歩道橋に、矢印とともに「熱田神宮 Atsuta Shrine」と表示があった。西門付近には、境内案内図、駐車場案内などがあったが、いずれも日本語のみであった。

境内では、英語あるいはピクトサインを使った表示もあった。しかし、表示の多くは日本語のみであった。「こころの小径」の案内看板表示には、「ご参拝に際しての注意事項」として「これより先は熱田神宮における最も神聖な場所です。」という文言については、日本語のほか、英語、中国語繁体字、韓国語でも表示していた（【図8】）。

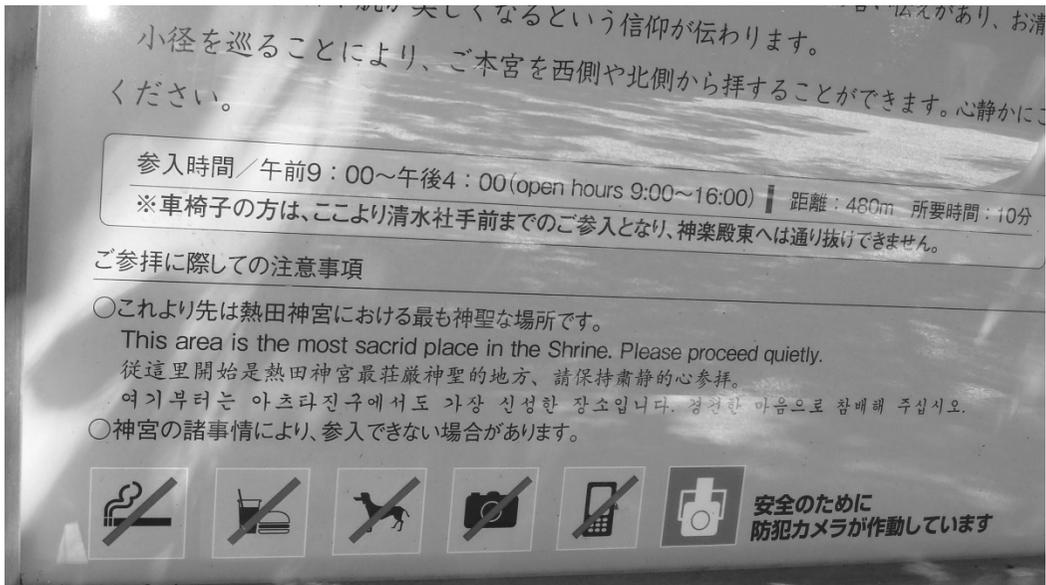
【図6 地下鉄神宮西町駅出口】



【図7 車ばらい入口】



【図8 こころの小径】





熱田神宮、名古屋城ともに韓国語による案内表示が少ない。そのため韓国人観光客は英語に頼ることになってしまうが、ある程度の韓国語の表示があれば、より楽しく、より楽に観光できる。

たとえば名古屋城で「天守閣」は「Castle Towers」と英訳表記されているけれども、「本丸御殿」の本丸は「Hommaru」と表記されていたのだから、「天守閣」も、「천수각」(チョンスカク)と表記されていれば、韓国語話者にはもっとわかりやすい。

また、韓国語表記がある場合も「つ」の発音の表記が「쓰」「쯔」とふたとおりあって統一されていない。熱田神宮の「神宮」も、日本語の発音そのまま「ジング(ウ); 친구」としたり、韓国語の発音に合わせた「ジングン; 신궁」としたりするなど、統一されていない。せっかく日本に来たのだから、日本語の読み方のまま表記されることで日本語を知るきっかけにもなるのだから、韓国語に訳された表記も併記できればより理解しやすい。

なお、ピクトサインは、ほとんどの場合韓国で使用されているものと差がないので、見るだけで何を意味するのか分かりやすいが、防犯カメラのピクトサインだけは韓国で一般的に用いられるものとかかなり違うため、分かりにくい。休憩所も背中を向ける日本のものとは少し異なる。

【図11 韓国のピクトサイン】

防犯カメラ



休憩所



### 2.3. 個人報告抜粋3 (森未紗姫) (担当: 森、熱田神宮と金山総合駅)

【熱田神宮】

[調査日: 9月5日] [研究調査担当範囲: 名鉄神宮前駅から東門経由～本殿]

熱田神宮の最寄りの名鉄神宮前駅から改札を出ると、神社のピクトサインとともに「熱田神宮 Atsuta Jingū」の文字が案内表示看板に記されている。駅構内の案内表示看板の多くでは、出口・方角を知らせるような「西出口 West Exit」のみ、日本語と英語、中国語、韓国語、ポルトガル語の5つの言語で記されていたが、「バスのりば Bus Boarding Area」「タクシーのりば Taxi Stop」「エレベーター Elevator」などの場所の方面を指す表記については、日本語と英語の2つの言語、さらにそれぞれのピクトサインで案内が示されていた。また、西出口へと向かう同駅構内通路の頭上には、大きく「ようこそ熱田神宮へ」という歓迎の看板が見受けられたが、これについては日本語による表記のみであり、多言語による対応がなかった。

先に触れたように、名鉄神宮前駅の案内表示では、熱田神宮は「Atsuta Jingū」と、ローマ字表記に「」が使用されている。一方で、駅を出てすぐ、熱田神宮前の横断歩道手前にある「熱田・宮宿 散策マップ」及び、歩道橋に設置された道路標識では、熱田神宮が「Atsuta Shrine」のように

表記されている。このような表示の差異は、表示を設置する機関ごとに持つそれぞれの表記基準の違いが原因となっている。

熱田神宮境内では、時折、英語やピクトサインを併記した表示もみられるが、基本的に、表示の多くは日本語表記のみとなっている。清水社の湧水に通じる「こころの小径」の案内看板表示における、参拝に際しての注意事項「これより先は熱田神宮における最も神聖な場所です。」には、日本語のほかに、英語、中国語繁体字、韓国語でも表示があった（(2. 2の【図8】参照）が、そのほかには多言語対応、特に中国語や韓国語を確認することはできなかったため、これは例外と言ってよいだろう。境内案内図でも、「本宮 HONGU」「祈祷殿 KITOUDEN」のような一部の主要建造物については、日本語とローマ字で名称が記載されているが、「手水舎」など、それ以外のものについては日本語表記の案内のみである。また、各建造物付近に立てられた解説看板も、日本語表記のみで示されている。さらに、境内にある誘導看板表示に関しては、「本宮・神楽殿 ほんぐう かぐらでん」の例のように、その多くが日本語漢字表記の下にひらがなで読みを表記してある。

熱田神宮では、その最寄りの公共交通機関における表示を含め、全体的な言語的統一はなされていないことが分かる。観光地において、観光客の利便性に配慮するには、その施設や観光区域内のみでの満足度を上げるだけでは不足がある。公共交通機関などの移動手段や案内所といった、観光先に到着するまでの人の流れも含めて考慮に入れるべきであり、そこに一定の基準を設けることで、観光施設一帯の地域に統一性を持たせることが望ましい。特に、ローマ字表記に関しては、案内表示を作成する機関ごとに独自の表記法を使用していることが、読みに混乱を生じさせる大きな原因となるため、行政が率先して基準となる要領を作成し倣わせるよう働きかける、早急な対応が求められる。

#### 【金山総合駅】

〔調査日：10月3日〕〔研究調査担当範囲：JR金山駅〕

JRでは、駅名や乗り場案内表示看板、発券機、注意喚起表示に至るまで、日本語と英語の2言語で表記されていた。（ピクトサインについては、エスカレーターやお手洗いのピクトサインはあったが、その他には見られなかった。）これには、2014年にJR東海が多言語表示について、外国語表示を国際的共通語の英語のみとしたことが大きく関係していると思われる。多言語表示をする言語数を限ることで、日本語と英語に対する視認性の点からは、利便性が向上したようにも受け取れる。だが、その2言語の話者、あるいは理解できる人以外にとっては、緊急時における理解言語がない、など不便な対応だともいえる。表示内容を瞬時に判断できるようにという目的をもって視認性の向上を図ったこの度のJR東海の対応は、その該当者のみが満足できるものとなり、結果的に、多くの利用が予想される中国人観光客などへの対応を無視したかたちとなってしまった。

金山総合駅コンコースにおける誘導案内看板の表示は、主に日本語と英語の2言語で表記されている。それでも、各路線の付近では、それぞれの鉄道会社の表記基準を持って表示されるため、駅構内全体で統一がなされているわけではない。

金山総合駅周辺案内図の、案内の地図上では一部の言語に限定されているが、地図欄外で地図上にあるピクトサインの凡例等を5言語（日本語、英語、韓国語、中国語簡体字、ポルトガル語）で表記している。また、地図によっては、主要施設のみであるが、地図上でも複数言語で記載しているものも見られた。

さらに、構内にある禁止事項の表示について、そのすべてに共通していることはピクトサインの活用だ。表記に関しては、日本語表記のみのもの、日本語と英語の2言語表記のもの、日本語、英語、中国語、韓国語の4言語表記のもの、など様々である。なかには、「禁煙」には「No Smoking」という英語表示とピクトサインが併記されているのに、そのすぐ横に表示されている「飲食禁止」には外国語表示がなくピクトサインのみという場合もあり、違和感を抱かざるをえない。

JRの案内表示については、視認性を重視して言語数を制限するべきか、あるいは、多くの利用者にとって分かりやすいような多言語整備を進めるべきか、どちらがより良い選択であるのか簡単には甲乙つけがたい。だが、言語数を減らして視認性を優先させる場合でも、やはり少しでも多くの利用者にとって利便性のあるものであることをよく考慮しなければならない。調査時点でのJR金山駅の案内表示では、文字表記がすべて黒文字でピクトサインの使用もあまり見られなかったが、中央線や東海道線、地下鉄を色別に表記したり、ナンバリングしたりすることで、言語の面以外の点からも視認性を向上させることができるのではないかと考える。

また、金山総合駅は、広大なコンコースからの各路線への乗り換えも分かりやすく、この構造は今後参考にされるべきものである。同時に、一つの総合駅として、全体の言語表示の統一が必要とされるようになるだろう。そのためにも、今一度、各路線が言語表示に関する足並みを揃えることに尽力してもらいたい。

### 3. 多言語案内表示の問題点

#### 3.1. 語用論的観点から (担当：文)

語用論では、そもそもなぜ言語表現するのか、とか、談話の原則から外れる言語行動をする場合について、そうする理由は何か、とか、言語そのものだけではなく、その背後にある行動原理を考察しようとする。案内表示であれば、なぜその場所にその表示を設置しようとしたのか、とか、目的にふさわしく設置されているのか、表示の仕方は適切か、とかいったことを問題にする。

熱田神宮と名古屋城は、誰のために表示するか、という点での違いが、表示のあり方に反映していた。名古屋城は、名古屋市が観光施設の中心として整備をおこなってきたからであろう。英語併用の表示は、かなり細かいところまでいきわたっている。しかし、それでも一部に日本語のみの表示がある。案内図や展示の説明などでは、日本語話者でも漢字が読めない子どもなどを想定して漢字表記にふりがなをつける配慮も随所で見られた。

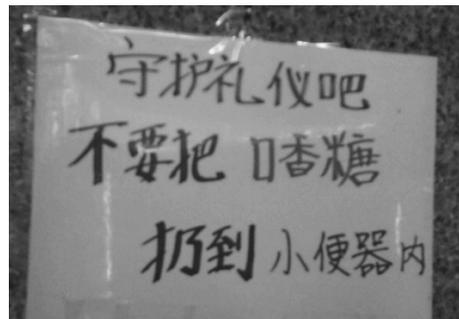
熱田神宮は、外国人観光客が増えたのが近年であり、案内表示はそれに追いついていない。これまででは初詣でや七五三を典型とする日本人の参拝客を対象として案内表示の配置や表示のしかたを考えてきたはずである。たとえば、大人の頭より高い位置に、施設のある方向を示す案内表示が設けられていたのは、人ごみの頭越しに見られるような工夫であろう（【図12】）。また、漢字が読めない子どもなどを想定して漢字表記にひらがなを添えた表示は多数あるが、外国人観光客を想定した、英語表示ないしローマ字表記でさえ多くはない。まして、日本語・英語以外の案内表示は、ごくわずかしかない。宝物館に、貼り紙で中国語の説明があったり、調査時ではなく2016年の初詣での時期であったが、トイレに「ガムを吐き捨てるな」という趣旨の中国語の注意書きがあったりした（【図13】）。必要に迫られた臨時の対応ということであろうが、将来を考えれば、ていねいな多言語表示が設置されることが望まれる。

表示の目的は何かという観点で、案内表示を分類すると、およそ次の3つになる。「位置案内表示」：どこに何があるか、「指示案内表示」：〇〇するには、どこへ行くか、「同定案内表示」：ここに、〇〇がある。「位置案内表示」は、地図・略図で、たいいてい現在位置がわかるようになっている。地図でも上が北とは限らず、設置場所によっては下が現在場所の近くで、上が向かっている方向へより離れた場所をあらわしていることがある。「指示案内表示」と「同定案内表示」は、両方あることで呼応した働きをする。調査した3施設では、それぞれ工夫されていたものの、たとえば熱田神宮でトイレの指示案内の方向へ行っても、同定案内が茂った木の葉のかげになって見にくい、といったことがあった。木々に恵まれた環境であるため、日々の確認が必要になるわけだ。

【図12 熱田神宮の見やすい表示】



【図13 トイレの貼り紙】



この度の調査を経てよく分かったことは、名古屋市内の有名観光地として名を挙げられる熱田神宮と名古屋城ではその最寄りの公共交通機関における表示を含め、全体的な言語的統一がなされていないことであった。多言語で表示する場合、日本語、英語、中国語（簡体字）、韓国語（ハングル表記）の4言語が多く採用されていたが、韓国語がなかったり、繁体字の表示があったりなかったり、ポルトガル語の表示があったりなかったり、かなりのばらつきがあった。さらに、JR、名鉄（名古屋鉄道）、市営地下鉄という管轄の違う交通機関の案内表示、さらに国土交通省が管轄する道路部分の表示と、名古屋市が管轄する道路周辺の案内表示、各種団体が設置した案内図などは、表示の方針も、表示の仕方もまちまちであった。

金山総合駅は、JR金山駅と、市営地下鉄のホームや改札口周辺では、英語表示がかなり徹底されていた。ホームや改札口以外ではどうかというと、一部の案内看板には日本語と英語の2言語表記があったものの、JR、名鉄、市営地下鉄のいずれもが、エレベーター、エスカレーター、トイレ、切符売り場、コインロッカー等についてはおよそ日本語のみであった。また、一つの看板に2言語の表記と日本語のみの表記が混在している場合が散見された。管轄の違いのほか、設置時期や担当者の違いによる不統一があるものと思われる。

金山総合駅の、それぞれの交通機関の改札口や、改札口などにつながるエスカレーターなどが設けられている地上のコンコース、共通通路では、見やすい位置に多言語およびピクトサインによる乗り換え案内の表示が上から吊り下げられている（【図14】）。大きくて視認しやすく、必要とする人に必要とされる乗り換えについての情報を効率よく伝えている、非常にすぐれた案内表示である。

【図14 金山駅コンコースの案内表示】



後に調査したところ、JR名古屋駅は、JR金山駅と同じく、案内表示は基本的に、日本語と英語のみであった。また、案内看板と地図にピクトサインが多く使われていた。しかし、コンコースの見やすい位置での、多言語およびピクトサインによる他の交通機関への乗り換え案内の表示は、非常に少なかった。

大きな駅では、交通機関を使い、乗り換えをしようとする駅の利用者にとって、どのような表示が必要か、便利なのか、という観点からの定期的な点検、検討、調整がなされることが望ましい。リニア開通を機に、名古屋駅の案内表示は一新される予定であるが、その際に所在地の自治体である名古屋市が主導的に調整すべきである。上記の、金山総合駅のすぐれた案内表示をモデルにすべきである。そして、そこで策定された方法・手段・デザインを、観光施設を中心に、市内のさまざまな施設に短期間で普及させるべきである。そうすることによって、名古屋市の都市としての姿勢を対外的に示すこともできる。いつも二番手である必要はない。全国にさきがけ、日本の都市としてトップをきって新しいモデルをつくってほしい。

また、東山動植物園専用の「スマートフォンアプリ東山動植物園」や、名古屋城、博物館で使われている多言語説明のスマホアプリがある。観光客が自分のスマートフォンを使用し、アプリをダウンロードすることで、ガイドマップ、館内案内、展示物の情報を見ることができるようになる。アプリケーションソフトは、掲示や案内表示と違って、手間さえかければいくつの言語にも対応可能であるし、修正や追加もどんどんできる。名古屋市は名古屋を応援するアプリも開発し、2020年までにサポーターを一万人に増やす目標を掲げているが、その一方で多言語対応アプリの開発にも尽力してほしい。

### 3.2. 表記論の観点から (担当：成田)

日本語の文字表記は、使用される文字体系の種類が多い。漢字、平仮名、片仮名が混在する上に、アルファベット(ローマ字)も使われることがある。逆にいえば、多言語表示にした場合に、ハングルとかアラビア文字とかを別とすれば、漢字やアルファベットのバリエーションは増えても、文字体系の種類はあまり増えない、ということになる。

「アルファベット(ローマ字)」という書き方をしたのは、両者が同一視されることが多いからである。「ローマ字」は「アルファベット」の一部なのだが、日本ではアルファベットとは「英語(のみ)のアルファベット表記」と思われがちである。つまり、ここでの「両者」とは、英語のアルファベット表記と、日本語のローマ字表記とのことである。しばしばこの二者が、同じものと見なされてしまう。ここでは、そのことに異を唱えたいわけであるが、まず、具体的にどういふことが問題になるか、示しておく。

報告の中に実例があげられているように、名鉄やJRでの駅名表示などではローマ字表記に「」

という長音符号<sup>4</sup>が使用されている。しかし、名古屋市営地下鉄では使用されていない。熱田神宮の「祈祷殿 KITOUDEN」は、オの長音を、「OU」と表記しているが、これは『ローマ字のつづり方』【1954（昭和29）年内閣告示第1号】では認められていない。

成田（2011）では、現在ローマ字表記の方式としてひろくおこなわれているものとして、

- < 1 > 「訓令式 長音符号方式」
- < 2 > ヘボン式
  - < 2-1 > 「ヘボン式 長音符号方式」
  - < 2-2 > ヘボン式 長音符号なし方式
    - < 2-2-1 > 「ヘボン式 英語方式」
    - < 2-2-2 > 「ヘボン式 OH方式」
- < 3 > 「かな置き換え方式」（長音符号なし「訓令式」「ヘボン式 英語方式」をふくむ）

という整理をした。

成田（2013）では、『ローマ字のつづり方』とそれに基づく学校教育では「訓令式 長音符号方式」《「大野次郎」という人名の表記を例にすると *Ôno Zirô* となる》か「ヘボン式 長音符号方式」《*Ôno Jirô*》、J Rや私鉄の駅名表示は「ヘボン式 長音符号方式」《*Ôno Jirô*》であり、地下鉄の駅名表示やJ Rなどのホームページの英語案内では「ヘボン式 英語方式」《*Ono Jiro*》、スポーツ選手のユニフォームの名前の表記やパスポートで許容されている名前の表記では「ヘボン式 OH方式」《*Ohno Jiroh*》、パソコンのローマ字入力などでは「かな置き換え方式」《*Oono Zirou*》《*Oono Jirou*》（ひらがなの現代仮名遣い「おおのじろう」を一字ずつローマ字に置き換える）、となる。」と説明した。「祈祷殿 KITOUDEN」は、おそらく「かな置き換え方式」《*Oono Zirou*》《*Oono Jirou*》であると思われる。

金山総合駅で見られるローマ字表記の不統一は、J Rや私鉄の駅名表示が「ヘボン式 長音符号方式」《*Ôno Jirô*》であるのに対し、地下鉄の駅名表示は「ヘボン式 英語方式」《*Ono Jiro*》であるという事情によるところが大きい。

日本は、1964年の「前の」東京オリンピックで「TOKYO」、1970年の万博で「OSAKA」と「（ヘボン式） 英語方式」で表記した。たぶん多くの日本人が「英語では、TOKYO、OSAKA と書くのが正しい」と思っている。本来は、『ローマ字のつづり方』は日本語の文章をローマ字で書くための目安として定められたもので、実用的には文章を書かないとしても、日本の地名や人名などの、日本語としてのローマ字表記を定めたはずなのだが、現在では、英語の文脈内で使用されるつづりが、日本語のローマ字表記としても正しいと思われる可能性が高い。地下鉄の駅名表示が「ヘボン式 英語方式」《*Ono Jiro*》になった背景には、この、英語の文脈内で使用されるつづ

<sup>4</sup> ここでローマ字の長音符号としているのは、『ローマ字のつづり方』で認められている「^」すなわち「曲折アクセント（アクサンシルコンプレックス）」または「˘」すなわち「マクロン」である。

りと、日本語のローマ字表記のつづりを同一視する感覚があると推測される。

名古屋市には「名古屋市 歩行者系サインマニュアル [第2次改訂版]」<sup>5</sup>という、よく練られたマニュアルがあり、道路に設置される案内板などはこれに依拠している。ここでは「原則として全ての日本語表記に英文を併記する。ただし、交通機関やその他の施設など、必要に応じて英文に加え ハングル、中国語、ポルトガル語を併記する。また、領事館を訪れる外国人への配慮など特に必要がある場合は、その外国語を併記する。」となっている。また、ローマ字表記については「名古屋市英文表示要領」なるものがあるようで、それに準じてヘボン式で長音符号なしで書くことになっているようである。たとえば「熱田神宮 Atsuta Shrine」「日泰寺 Nittaiji Temple」「呼続大橋 Yobitsugi-ohashi Bridge」「名東本通 Meito-hondori」といった例が示されている。

この「名古屋市英文表示要領」という名称が象徴するように、日本語のローマ字表記が、実際に使用される場面では、英語の文脈内で使用される日本の固有名詞のつづり、と扱われている。一方ではローマ字で書きさえすれば国際化と思われがちである。これについては一度根本的に見直す必要がある。本来なら文化庁が動いて『ローマ字のつづり方』を改訂する議論が本格化されてしかるべきだと思うが、英語一辺倒、英語優先の風潮の中では、なかなか進展が望めない。せめて、リニア新幹線の、名古屋までの開通に向けての、名古屋駅の整備において、名古屋市が主導してJRや名鉄と調整をはかり、案内表示のローマ字表示と英語表示の整備をすすめていただきたい。

#### 4. おわりに (担当：成田)

観光庁編 (2016)『観光白書 平成28年版』には、平成27年度に講じた施策の、多言語対応の強化として、「鉄道駅のナンバリング導入の促進」「多言語翻訳アプリ・ナビゲーション・地図の開発」「地図の多言語対応」といった項目があげられている<sup>6</sup>。

鉄道駅のナンバリングは、名鉄やJR東海が導入して、名古屋圏ではおおむね完了している。やはり、これからは「多言語翻訳アプリ・ナビゲーション・地図の開発」「地図の多言語対応」が課題になるであろう。

既存の表示については、不統一が最大の問題である。先に触れたように、名鉄神宮前駅の案内表示では、熱田神宮は「Atsuta Jingū」と、ローマ字表記に「」が使用されている。一方で、駅を出てすぐ、熱田神宮前の横断歩道手前にある「熱田・宮宿 散策マップ」及び、歩道橋に設置された道路標識では、熱田神宮が「Atsuta Shrine」のように表記されている。このような表示の差異は、表示を設置する機関ごとに持つそれぞれの表記基準の違いが原因となっている。個々の事情があ

<sup>5</sup> 名古屋市の設置する歩行者系サインの基本となるべきものとして検討し、これに基づいて歩行者系サインマニュアルをさだめた。名古屋市では、歩行者のために市が設置する標識を対象として、昭和63年4月に策定した。平成7年3月と、平成14年9月に改定されている。

<sup>6</sup> 観光庁編 (2016)『観光白書 平成28年版』pp.135-137

るのは当然だが、観光事業のためには自治体が音頭をとって調整して統一をはかってほしい。

(2017年11月20日 稿)

(2017年12月20日 改稿)

## 参考文献

- 赤瀬達三【あかせ・たつぞう】(2015)『駅をデザインする』ちくま新書 1112
- 井上史雄【いのうえ・ふみお】(2015)「経済言語学の考え方」『日本語学』vol.34-6 明治書院
- 観光庁【かんこうちょう】(国土交通省)編(2016)『観光白書 平成28年版』昭和情報プロセス株式会社
- 庄司博史【しょうじ・ひろし】・ペート=バックハウス・フロリアン=マルクス編著(2009)『日本の言語景観』三元社
- 成田徹男【なりた・てつお】(2011)「ローマ字表記の問題点」『人間文化研究』16号(名古屋市立大学大学院人間文化研究科)
- 成田徹男【なりた・てつお】(2013)「名古屋のことば」山田・吉田編(2013)所収
- 別所良美【べっしょ・よしみ】・林浩一郎【はやし・こういちろう】(2017)『シンポジウム『現代の家守』と持続可能な都市と地域社会を考える』報告書』名古屋市立大学人文社会学部/大学院人間文化研究科
- 山田明【やまだ・あきら】・吉田一彦【よしだ・かずひこ】編(2013)『名古屋の観光力 歴史・文化・まちづくりからのまなざし』風媒社

## 参考サイト

- 名古屋市住宅都市局、2002「名古屋市 歩行者系サインマニュアル [第2次改訂版]」  
[http://www.city.nagoya.jp/jutakutoshi/cmsfiles/contents/0000028/28145/signmanualforwalkers\(ver.H25.12\).pdf](http://www.city.nagoya.jp/jutakutoshi/cmsfiles/contents/0000028/28145/signmanualforwalkers(ver.H25.12).pdf)  
2017.10.20 閲覧
- 名古屋城公式ホームページ <http://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/> 「スマホでタッチ!名古屋城」について  
[http://www.city.nagoya.jp/shiminkeizai/cmsfiles/contents/0000069/69155/150320\\_sumahodetattinagoyajyonituite.pdf](http://www.city.nagoya.jp/shiminkeizai/cmsfiles/contents/0000069/69155/150320_sumahodetattinagoyajyonituite.pdf) 2015.12.02 閲覧